

セイジ・オザワ 松本フェスティバルの創設をめぐって

——「松本」との結節点を考える——

濱崎友絵、茂原奈保子、田中大暉¹

はじめに

本稿は、セイジ・オザワ 松本フェスティバルの創設をめぐり、松本という地の諸相と音楽との関係性を検討するものである。著者らは、2018年度から2020年度にかけて、同フェスティバルの創設の経緯と背景を明らかにする目的で、関係者へのインタビューおよび当時の資料調査と検証をおこなってきた²。本稿は、その成果の一部をまとめるものである。

セイジ・オザワ 松本フェスティバルは、松本市を拠点に1992年に開幕されたクラシック音楽祭である。例年、8月から9月にかけての約1か月間、小澤征爾が率いるサイトウ・キネン・オーケストラのコンサートやオペラ公演、吹奏楽による歓迎パレードや子供のための演奏会など多彩なプログラムが生まれ、松本の街はフェスティバル一色に染まる。1992年から2019年にかけてのフェスティバルの累計来場者数は200万人以上と報告されていることから³、全国的に、その認知度、定着度が深化していることがうかがえる。

セイジ・オザワ 松本フェスティバルは、開幕当初より小澤征爾とサイトウ・キネン・オーケストラによる演奏やオペラ公演が人々の注目を集め、多くの聴衆を松本へ呼び込む牽引力となってきた。「年に一度の七夕オーケストラ」や「奇跡のオーケストラ」⁴といったフレーズが端的に物語るように、同フェスティバルは「非日常的空間と時間の共有」といったフェスティバルの祝祭性と分かち難く結びつき、その一回性や希少性が強調されてきた。これまで同フェスティバルに関する報道の7、8割が、公式公演や「若い人のための『サイトウ・キネン室内楽勉強会』」に関するものであったという指摘⁵からも、人々の関心は、フェ

¹ 茂原奈保子および田中大暉の両名ともに信州大学人文科学研究科修士課程（芸術コミュニケーション領域）2020年度修了。

² 信州大学人文学部とセイジ・オザワ 松本フェスティバル実行委員会は、2016年度より連携事業をおこなってきた。SKOメンバーや学生たちとの共同で実施した関連イベント「教えて！音楽のレシピ」（2016年度-2018年度）に加え、OMFの創設期を支えた方々のインタビューをまとめた『こうしてフェスティバルは始まった—OMF研究ゼミ：インタビューからみるその原点』（報告書、2018年度）、同前増補版（報告書、2019年度）を刊行してきた。これらの報告書は大学院ゼミナールの一環として作成したもので、本稿はこれら二つの報告書の作成に携わり、2020年度後期大学院ゼミにおいても調査に関わった二名の大学院生（茂原、田中）と共にまとめたものである。

³ セイジ・オザワ 松本フェスティバル公式サイト <https://www.ozawa-festival.com/news/2020/07.html>（2021年4月23日閲覧）

⁴ 小澤幹夫（1993）『松本にブルームスが流れた日—小澤征爾とサイトウ・キネン・オーケストラ』新潮社、17-45頁。

⁵ 小泉元宏（2009）「市民社会との関わりから見た音楽祭研究に向けて—『サイトウ・キネン・フェスティバル松本』における市民社会との関わりを事例として—」『音楽教育学 39(2)』、17頁。

スティバルが体现する「特別感」に向けられる傾向があったとってよいだろう。

一方、およそ30年に渡ってフェスティバルが継続されてきた事実を鑑みるならば、松本という地には、フェスティバルの一回性や希少性を支える「恒常性」や「日常性」が介在してきたとみてよいはずである。現に宮本（2011）は、同フェスティバルを「地域参加型」の性格を有する音楽祭として位置づけ、地域住民が主体的に関わることによって持続されてきた点を指摘している⁶。

これまでの先行研究においては、こうした「地域参加型」としてのフェスティバルを積極的に評価する傾向があった。しかし一方で松本という開催地の文脈で、この「形」がいかに目指され、何が起こっていったのかという点について具体的に検討された研究は、管見の限り無い。そこで本稿では、先述の宮本（2011）と同様、セイジ・オザワ 松本フェスティバルを「地域参加型」音楽祭と位置づけながら、開催地松本がフェスティバルといかなる関係性を創出していったのかを検討することを主眼に据える。なお、フェスティバルが継続されてきた30年間を対象とするのは本研究の範疇を超えるため、本稿ではとくにフェスティバルの創設期にあたる1992年前後を主たる対象期間とし、必要に応じて、その対象範囲を拡げるものとする。

本稿は以下の手順で検討を進める。まず第1章で音楽祭と地域との関連性にかかわる先行研究を整理し、セイジ・オザワ 松本フェスティバルを日本の音楽祭の系譜上に位置づける。続く第2章で、フェスティバルを受け入れた開催地松本の「土壌」について、戦後から1980年代という長期的な観点からその文脈の概要を扱い、第3章で1992年に開幕されたフェスティバルへの道筋と実相を、主にインタビュー調査から整理する。その上で、第4章において、これまで先行研究でほとんど言及されることがなかった、約1,200人が音楽祭に参加したイベントである吹奏楽パレード・合同演奏会に着目し、主に行政資料を基盤としながら本計画が立案されていった経緯を明らかにする。これらを通して、フェスティバルと松本の「結節点」の形成過程とその関係性を検討していく。

なお「フェスティバル」⁷という語は、演劇や舞踊など、芸術一般に結び付けられ、厳密に言えば「音楽祭」より広義の概念となり得るが、「音楽祭」という語そのものも英語で music festival とされるため、本稿では便宜上、「フェスティバル」と「音楽祭」は互換可能な語として扱うものとする。またセイジ・オザワ 松本フェスティバルという名称は、2015年に小澤征爾総監督の名を冠して改称されたが、とくに対象期となる1992年の創設期には「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」と称されていた。そのため創設期を含め2014年までの事項を論じる際には、当時の音楽祭の名称「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」（または「サイトウ・キネン・フェスティバル」あるいはSKF）で統一する。

⁶ 宮本直美（2011）「日本における音楽祭の変遷とオーセンティシティ」『社会学評論第62巻第3号』、380-385頁。

⁷ 「フェスティバル」はラテン語の festum に由来し、その原義は「めったにないご馳走」を意味した。久保田慶一（2001）「音楽祭とは」『日本の音楽祭・フェスティバル』財団法人音楽文化創造、5頁。

1. 先行研究——日本における音楽祭と地域、サイトウ・キネン・フェスティバル

日本国内におけるクラシック音楽による音楽祭の展開は、1958年に創設された「第1回大阪国際芸術祭」（現・大阪国際フェスティバル）がその端緒と目されている。それ以降、80年代にはバブル経済の追い風に乗って各地に音楽祭が創設され、90年代には「まるで『雨後の竹の子』のように」⁸音楽祭やフェスティバルと名のつくイベントが創出された。2000年代初頭には全国で「音楽祭」という名のもので行われていた催し（ただし音楽を中心とした「芸術祭」も含む）は140を数えるまでになったとされる⁹。

これらの音楽祭の歴史には、「半世紀にわたる展開の中で“本物”に近づこうと試行錯誤した経緯」¹⁰があると指摘される。それは、ザルツブルク音楽祭におけるモーツァルトの存在や、バイロイト音楽祭におけるワーグナーの存在といった「御神体」¹¹を有さない日本という土地において、ヨーロッパの伝統音楽であるクラシック音楽による音楽祭を開催し、享受することの意義が模索された歴史であったといえる。

音楽祭の意義が求められた背景には、音楽祭が地元に関係ない「場所貸し」や「席貸し」的性格のものにとどまる限り、「住民にも聴衆にも魅力を持たず、結果的に十分な動員を得られずに財政的な問題を抱え」¹²、消滅や方向転換を余儀なくされた経緯があった。ここでは、開催地域との接点を見出すことなく、外部の演奏家を招聘して音楽祭を開催することの求心力の弱さが改めて認識されている。いかに国際的に名の通った演奏家を招聘し、一流の演奏を繰り広げたとしても、その地域で音楽祭を開催する妥当性がなければ、かえって「グローバルな規模や敷居の高い音楽祭のイメージが、地域住民にとって疎遠な音楽祭になるという負の側面も一部で見られるようになる」¹³といった状況があった。山本（2003）は、更にラディカルに、地域と関わりのない音楽祭をダム建設にたとえ、「地域に必要とされない」ダム計画も、地域にとって必然性のない音楽祭の開催も、地域の住民にとってはそれほどの差は無いと断じ¹⁴、「今後はどのような規模で行われる音楽祭であっても、『なぜそこで開催されなくてはならないか』という必然性が問われていくだろう」¹⁵と、地域との接点の必要を強調している。

こうした音楽祭開催の必然性と意義に向き合ったのが、1990年代の音楽祭を取り巻く潮流であったといえる。久保田（2001）は、1990年代に創始された音楽祭の特徴を、「大企業や専門家が主催し主導するという形の音楽祭ではなく、地域住民が積極的に参加する音楽祭が

⁸ 同前、1頁。

⁹ 山本美紀（2003）「戦後の日本における国際音楽祭の受容に関する一考察」『文化経済学 3(3)』、69頁。

¹⁰ 宮本直美（2011）「日本における音楽祭の変遷とオーセンシティティ」『社会学評論 第62巻第3号』、378頁。

¹¹ 久保田慶一（2001）、前掲書、5頁。

¹² 宮本直美（2011）、前掲書、382頁。

¹³ 伊志嶺絵里子（2006）「日本の音楽祭の活動状況とマネージメントに関する一考察—市民参加、協働のあり方について—」『文化経済学 5(1)』、84頁。

¹⁴ 山本美紀（2003）、前掲書、71頁。

¹⁵ 同前、71頁。

多く誕生した」¹⁶と総括し、さらに伊志嶺（2006）も、1990年代に創始された音楽祭には、地域住民にとって魅力ある町を創造することや、市民同士の交流や姉妹都市間の交流などに主眼をおいた傾向が一部で見られるようになったと指摘する¹⁷。各地の音楽祭では、地域住民との接点を創出するため、ボランティアを募って住民の自発的な参加を促すほか、地域に馴染みの深い建物や場所を演奏会場とし、町の風景に音楽祭を溶け込ませる試みがなされるようになったのも¹⁸、その地域において音楽祭を開催することの妥当性を、「御神体」の存在の代わりに地域社会や住民との関係性のうちに見出そうと試行錯誤した結果であったといえよう。

こうした文脈上で登場するのが、サイトウ・キネン・フェスティバル松本であった。パシフィック・ミュージック・フェスティバル（1990年-）とともにボランティアの自主的な体制を指摘した伊志嶺（2006）や、地元の小中学生の吹奏楽パレードや無料の星空コンサート、市民1,000人による合唱やボランティアによるテント村の運営などに言及した宮本（2011）など、先行研究においては、同フェスティバルの音楽祭と地域との関係性が積極的に評価されている。その中でも、より具体的に市民社会との関わりについて論じたのが小泉（2009）である。小泉は、4つの側面からサイトウ・キネン・フェスティバル（SKF）を整理した。すなわち、日本あるいはアジアから西洋音楽を発信する音楽祭としての「芸術発信の場としてのSKF」、次世代の西洋クラシック音楽文化を担う演奏家を育成する「若手演奏家育成の場としてのSKF」、街なかでのコンサートや小中学生を対象とした演奏会など市民が音楽と触れ合う機会を広げる「アウトリーチ活動の場としてのSKF」、そして歓迎演奏会や吹奏楽パレードをはじめとし市民自らが音楽を発信する場を設ける「市民による音楽発表の場としてのSKF」である¹⁹。サイトウ・キネン・フェスティバルをきっかけとして誕生した松本ミュージックフェスティバルの例や、音楽祭に主体的に関わるボランティアの例を挙げながら、新たな文化創造のための場が生み出されていることを指摘した小泉は、同フェスティバルを多面的な市民社会とのつながりを創出することに成功した例として評している。さらにこのフェスティバルが芸術発信の理念とならんで市民社会との関わりを重視したことによって、「地域で音楽祭を開催していくための事業運営のあり方や、観客あるいは財源を出資する主体にとって魅力ある音楽祭へとつながり、事業継続への可否を分けた側面があるのではないかと」²⁰と考察し、市民社会との関わりを音楽祭の持続可能性と結びつけている²¹。

こうした先行研究が強調するのは、より持続可能な音楽祭の在り方と開催地との関係性を、フェスティバル開催の必然性とその意義に結びつけて当該地域自らが見出そうとする主体的な動きそのものであったといえる。サイトウ・キネン・フェスティバルが創設期において置かれていた時代潮流とは、まさにこうした音楽祭の系譜に位置付けることができる。

¹⁶ 久保田慶一（2001）、前掲書、1頁。

¹⁷ 伊志嶺絵里子（2006）、前掲書、84頁。

¹⁸ 宮本直美（2011）、前掲書、384頁。

¹⁹ 小泉元宏（2009）「市民社会との関わりから見た音楽祭研究に向けて—『サイトウ・キネン・フェスティバル松本』における市民社会との関わりを事例として—」『音楽教育学 39(2)』、14-17頁。

²⁰ 同前、17-20頁。

²¹ なお、小泉のいう「市民社会」とは、「Habermas（1990）が指摘する〈非国家・非市場〉的領域の意。『市民』は『市民社会』の社会的構成員を指す」（同前、13頁）と補足されている。

2. フェスティバルの土壌——松本市における音楽とスポーツ

それではサイトウ・キネン・フェスティバルは、いかにして開催地「松本」の文脈に組み込まれることになったのだろうか。「音楽祭で展開される芸術活動は、あらゆる意味で、その地域の文化的背景の縛りを受ける」²²という指摘に基づけば、松本の地域的特性や文化的土壌が同フェスティバルの方向性を導いたとする見方は、一定の妥当性を持つといえる。こうした文脈で戦後の松本市の文化的素地を考えるならば、その象徴的な出来事の一つとして捉えられるのが、1985年9月26日に松本市が発表した「音楽とスポーツ都市宣言」であろう。これは「市民憲章・都市宣言」として市がまちづくりのビジョンを掲げるために行う9つの都市宣言のうち5番目²³に宣言されたもので、唯一、文化芸術について言及しているものである。「伝統ある文化的な風土のなかで、音楽を愛しスポーツに親しめるまちづくりを進める」²⁴とし、音楽とスポーツを並列化しながら「まちづくり」の推進を明言した宣言は全国的にみても稀有と言え²⁵、松本の地域性と独自性を象徴していると言ってよい。そこでここでは、松本という地が培ってきた地域的特性を、とくに音楽とスポーツという二つの観点から簡潔に整理することで、サイトウ・キネン・フェスティバルとの接合点の手掛かりを探ってみたい。なお、こうした「土壌」の形成には長期的視野が必要とされるため、検討対象期は戦後から1980年代までとし、松本市が編纂した『松本市史 第二巻歴史編Ⅳ 現代』（1997年）を主に参照しながら概括していく²⁶。

戦後の松本と音楽との関係を見ると、ひととき注目されるのが、音楽教育の進展である。文化運動こそが人間の考え方を高めるとする思想や、鈴木鎮一の「音楽を通じて子供の能力を育てる」という才能教育運動に共鳴した渡辺幾太郎らによって1946年に松本音楽院（後にスズキ・メソッドを推進した才能教育研究会）が開院されると、子どもや学生たちに対する「音楽教育熱」は次第に広がりを見せ、1948年4月の松本児童合唱団発足、同年10月の第1

²² 山本（2003）、前掲書、71頁。

²³ 松本市公式ホームページ <https://www.city.matsumoto.nagano.jp/shisei/siyakusyo/about/kensho.html>（2021年4月20日閲覧）。宣言順に「安全都市宣言」（1962年：昭和37年）、「公明選挙都市宣言」（1963年：昭和38年）、「心身障害者福祉都市宣言」（1974年：昭和49年）、「部落解放都市宣言」（1976年：昭和51年）、「音楽とスポーツ都市宣言」（1985年：昭和60年）、「平和都市宣言」（1986年：昭和61年）、「暴力追放都市宣言」（1988年：昭和63年）、「＜献血・献眼・献腎＞三献運動推進都市宣言」（1997年：平成9年）、「健康寿命延伸都市宣言」（2013年：平成25年）となっている。また現在では、松本市は「三ガク都」というフレーズを用いて、「岳・楽・学」の3つの「ガク」を、市を象徴する要素として位置付けている。松本市公式ホームページ「新たな総合計画（基本構想2030、第11次基本計画）の策定を進めています」<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/smph/shisei/sogo/20200204sougoukeikaku.html#cms77FF4>（2021年4月24日閲覧）

²⁴ 同前、松本市公式ホームページ「市民憲章・都市宣言」。<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/shisei/siyakusyo/about/kensho.html>（2021年4月20日閲覧）

²⁵ 全国に先駆けて「スポーツと音楽都市宣言」をおこなったのは新潟市で、昭和43年（1968年）のことであった。<https://www.city.niigata.lg.jp/smph/kanko/sport/oshirase/sports2020ongaku.html>（2021年4月20日閲覧）。

²⁶ 主に参照したのは、「第2節 芸術と工芸、宗教」（926-954頁）および「第3節 近代スポーツから現代スポーツへ」（955-975頁）となる。

回県下学生音楽コンクールの松本市での開催へと結びついていく。翌年4月には飯田学生音楽連盟が結成されるなど、その運動は長野、松本、上田に波及し、県学生音楽連盟がつくられることになる。こうした流れは学生のみならず市民の音楽活動の活性化も促すこととなった。

1951年には現在まで続く松本交響楽団が発足するなど団体の組織運営も活発に行われ、数々の音楽会が開催されていった。【表1】は1946年(昭和21年)から1988年(昭和63年)にかけて松本市で開催されたクラシック系演奏会の抜粋である。掲載数は限定的であるもの

年月	演奏会名	主催者名
昭和21.11	松本音楽院開校記念音楽会	才能教育研究会
同	野淵賢舟(バイオリン)加古三枝子(ソプラノ)安藤仁一郎(ピアノ)演奏会	松本音楽協会
22.3	絃楽四重奏(日響メンバー)とオーケストラ合同演奏会(指揮野田等)	松本音楽協会 東筑摩音楽同好会 松本音楽協会
23.5	安川加寿子ピアノ独奏会	松本音楽協会
23.10	江藤玲子(ピアノ)豊田耕児(バイオリン)独奏会	松本音楽協会
24.5	諏訪根自子バイオリン独奏会	松本音楽協会
24.6	第9交響曲大音楽会(日本交響楽団と地元合唱団)	松本市・信陽新聞社
24.8	岡本敏明合唱指導講習会	東筑摩音楽同好会
24.11	ユーカリ合唱団発表会	ユーカリ合唱団
25.5	豊田耕児バイオリン独奏会	信濃毎日新聞社
25.5	諏訪光世(バイオリン)田村広(ピアノ)独奏会	松本音楽協会
26.5	梶原亮ピアノ独奏会	松本芸術協会
26.6	クロイツァーピアノ独奏会	信濃毎日新聞社
26.8	松本絃楽団発表会(指揮鈴木鎮一)	松本音楽協会
26.9	東京音楽学校独唱と合唱演奏会(酒井教授他)	同・朝日新聞社
26.10	植野豊子三宅洋一朗演奏会	松本中劇
同	管弦楽と松本市民合唱団演奏会(指揮近衛秀麿)	松本芸術協会
26.11	近衛交響楽団演奏会(指揮近衛秀麿)	松本芸術協会
同	合唱と管弦楽演奏会	中信音楽文化連盟
27.10	アドリアンコール発表演奏会(第二回)	松本教育音楽研究会
27.11	合唱と管弦楽の夕(第三回)	中信音楽文化連盟
27.12	近衛交響楽団演奏会(指揮近衛秀麿)	同・朝日新聞社
28.6	小岩井幸渡伊欽送独唱会	信陽新聞社
28.11	コルトー(フランス)ピアノ独奏会	朝日新聞社
同	ヒッシュ(ドイツ)独唱会	同
同	永原上枝(独唱)高木東六(ピアノ)演奏会	永原上枝後援会
29.1	植野豊子、松浦豊明独奏会	松本市
29.4	松本交響楽団第一回発表会(指揮小川文友、福沢茂、ピアノ独奏岩附敬子)	松本交響楽団 林源二郎後援会 東筑摩音楽同好会 松本市教育委員会 毎日新聞社
29.5	林源二郎独唱会(ピアノ川上良武)	同・松本市・県教委
29.8	東京少年合唱隊(指揮ポーロ、アメイ神父、長谷川新一)	信濃毎日新聞社
29.10	安川加寿子ピアノ独奏会	松本市教育委員会
30.4	ドン・コサック合唱団演奏会	毎日新聞社
30.5	長野県交響楽連盟演奏会	同・松本市・県教委
30.6	NIKK交響楽団演奏会	信濃毎日新聞社
31.6	歌劇「カペレリケルスティカーナ」公演	森民樹歌劇研究所
31.11	声の交響曲と世界民謡の夕(東京混声合唱団)	松本教育音楽研究会 東筑摩音楽同好会
32.4	黒人歌手ジョージ・ラスター独唱会	信濃毎日新聞社
32.12	松本交響楽団第二回発表演奏会	中信音楽文化連盟
33.3	ワルター・ハツツイツヒ・ピアノ演奏会	信濃毎日新聞社
33.5	諏訪根自子バイオリン独奏会	松本芸術協会
33.6	岡田高弘ピアノ独奏会	松本芸術協会
33.11	辻久子バイオリン独奏会	同
同	松本交響楽団第三回発表演奏会	中信音楽文化連盟
34.7	巖本真理バイオリン独奏会	松本芸術協会
34.9	東京混声合唱団とメーラルカルテット大演奏会(指揮田中信昭)	松本芸術学園
34.10	東京芸術大学職員生徒70人オーケストラ演奏会	松本芸術協会
35.5	教育オペラ「手古奈」公演	松本芸術学園
同	松本交響楽団10周年記念大演奏会	松本交響楽団
35.7	室内楽演奏会(東京アンサンブルソナーレ)	松本芸術学園
35.10	創作オペラ「沙羅」と「卒塔婆小町」公演	松本芸術協会
36.9	窪田敬独唱会	窪田敬後援会
36.12	山浦鶴雄独唱会 ピアノ岩附敬子	松本教育音楽研究会
37.10	飯田忠文独唱会 ピアノ大久保恒友	飯田忠文後援会
39.7	ドン・コサック合唱団公演	信濃毎日新聞社
39.11	サム・チャーラー楽団演奏会	信濃毎日新聞社
45.10	マイセル・モイーズ講習会	才能教育研究会
46.11	イ・ムジチ室内合奏団演奏会	才能教育研究会
48.2	ベルリン放送交響楽団公演コンサートマスター豊田耕児	
48.10	邦楽4人の会と巖本真理絃楽四重奏団の夕	信濃毎日新聞社
48.11	渡辺暁雄指揮県合唱連盟コーラス、信大交響楽団第九演奏会	
49.9	県三曲協会創立20周年記念演奏会	
52.10	新日本フィルハーモニー演奏会	信濃毎日新聞社
57.12	新日本フィル・第九演奏会	信濃毎日新聞社
58.5	小沢征爾指揮新日本フィル演奏会	信濃毎日新聞社
62.6	五嶋みどりバイオリンリサイタル	信濃毎日新聞社
62.10	音楽文化ホール・バイアオルガン竣工記念演奏会	松本市
63.3	G.ヘッツェルバイオリンリサイタル	信濃毎日新聞社

【表1】『松本市史 第二巻歴史編Ⅳ 現代』(1997)、940頁より転載

の、市内では終戦直後から1980年代まで活発に音楽会が開催されていたことがうかがえる。その内容は1951年（昭和26年）の近衛秀麿指揮による松本市民合唱団の演奏や1973年（昭和48年）の信大交響楽団の第九交響曲など一般市民が合唱や演奏を行うものから、1953年（昭和28年）のピアニストのコルトーや1971年（昭和46年）のイ・ムジチ室内合奏団をはじめとする国内外のプロの演奏家を招聘したプログラムまで多種多様である。また主催者をもみても、松本音楽協会や松本芸術協会²⁷、信濃毎日新聞社など、松本を拠点とする組織が積極的に関与していたことが読み取れる。このように度々音楽に触れる機会が設けられたことは、市民の音楽に対する親しみを誘発し、演奏するだけでなく、鑑賞者としての態度を育てる土壌の醸成に結びついたのではないかと考えられる。

またスポーツをめぐる展開も、音楽と同じく市民への拡張という側面を明確に持っていた。その端緒となったのが、松本市で1958年9月におこなわれた第1回市民体育祭である。これは1960年には芸術分野の催しと同時に開催する市民芸術文化祭となるが、1994年に松本市民体育大会として現在まで続くスポーツ単体の催しとなった。また、昭和時代に開催された日本における最大規模のイベントのひとつである「国民体育大会（国体）」が1978年に松本市で実施されたことも特筆すべきことであろう。これは1946年以降現在に至るまで、各都道府県が開催地を持ち回るかたちで毎年2期にわたって開催されてきたスポーツ大会で、長野県は1948年に初めてその招致に名乗りを上げ、実現までに約30年間の時を要した。松本市は、同大会が長野県内各地に設定した会場（自治体単位）のひとつとなっており、1972年には市独自で「松本市国体準備委員会」を発足させ市民総参加の大会を目指した。このとき掲げられた「一人一役」という謳い文句により多くの市民の参加が推進され、その後の地域づくりや市民運動などに成果を残したとされる。さらに第14回全国身体障害者スポーツ大会に向けて、77年に市民組織「第14回全国身体障害者スポーツ大会を成功させる会」が発足するなど、年を経るごとに「官民一体活動」体制が強化され、市民の間にスポーツの浸透が促進されていった。

このように見てくると、音楽は、当初、教育的側面と結びつきながら各種団体の設立、演奏会開催へ結びつき市民に浸透していったとみることができ、スポーツは、市民体育祭や国民体育大会を経て行政と市民とが官民一体となって協力する体制が構築されていったことによって市民参加が促進されたとみることができ。もっとも、戦後から1980年代にかけて松本で開催された演奏会や、スポーツの「官民一体の協力体制」の実態について、より詳細な検討が必要であろうが、いずれも「市民への浸透」を目指してきた点で一致しているとみてよく、かつ両者ともに「祝祭性」と結びつく性格を有している点で共通する。1985年9月に「音楽とスポーツ都市宣言」がおこなわれた翌月に、松本市初の音楽専用コンサートホールとなる松本市音楽文化ホール（ザ・ハーモニーホール）が完成したことも、この宣言を後押しすることになったといえる。

以上のように、松本市には戦後から音楽およびスポーツの市民への浸透という方向性があり、これらを通して祝祭性を共有できる「場」が少なからず構築されていたとみることができ。小澤征爾は、サイトウ・キネン・フェスティバルをおこなうにあたって、自然環境・

²⁷ 松本音楽協会や松本芸術協会ともに詳細については未調査である。

音楽文化施設・地理的条件・音楽活動・宿泊施設などの点から松本市がもっとも適地であるとして開催支援を求めたとされるが²⁸、おそらく小澤が想定した以上にフェスティバルを受け入れる「土壌」が松本には醸成されつつあったとみることができる。

3. サイトウ・キネン・フェスティバル松本の開幕に向けて

フェスティバル開幕前夜

では、こうした松本の地においてサイトウ・キネン・フェスティバルはどのように幕を開けていくことになったのであろうか。この点を検討する上で、まず本章においては、主に関係者とのインタビュー調査²⁹に基づきながら、行政、民間企業、市民の三つの視点から、フェスティバル開幕前の松本における「組織と人」の相関関係を確認し、さらにフェスティバルの全体像と内実を明示していく。これを踏まえた上で続く第4章で、吹奏楽パレード・合同演奏会の立案経緯を追い、フェスティバルと松本の「結節点」の具体的な形成過程を検討していきたい。

松本でのフェスティバル開催が正式に公表されたのは、開幕まで1年を切った1991年11月のことであった。松本市と長野県は共催という形をとった³⁰。当時の松本市の人口は約19万6千人、フェスティバル総事業費は約6億円（長野県1億円、松本市1億円、事業収入7,500万円、民間助成3～4億円）³¹で、これは、札幌で開催されるパシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）に次ぐ、国内最大規模の事業費であった³²。長野県、松本市ともに、音楽文化の振興や地域振興のうえで大きなインパクトになることから同フェスティバルの支援を決定し、準備を開始した。なお、長野県は当時1998年冬季オリンピック・パラリンピックの誘致を決定しており、この開会式で演奏されたベートーベン交響曲第9番の指揮者に小澤を起用していたことも県の承認を後押しすることになった。

まず行政の観点からみると、1992年4月以降、運営体制の構築が次々と進められていった。同年4月15日には松本市教育委員会のなかに本部扱いとなる国際音楽推進室が設置

²⁸ 松本市編（1997）『松本市史 第二巻歴史編Ⅳ 現代』、974頁。

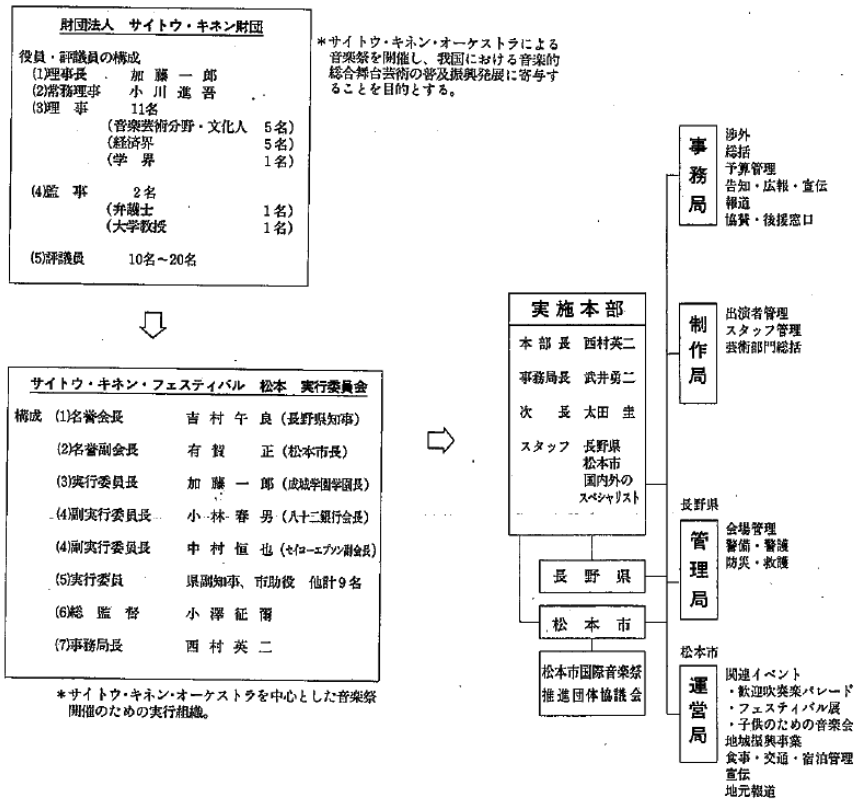
²⁹ インタビュー日時順に、赤廣三郎氏（2018年11月20日、2021年1月16日）、青山織人氏（2018年12月11日）、武井勇二氏（セイジ・オザワ 松本フェスティバル 総合コーディネーター）、猶井正幸氏（SKO・ホルン奏者、セイジ・オザワ 松本フェスティバル実行委員）、萩原透氏（2019年12月16日）、堀伝氏（2020年1月14日）、森安淳氏（2020年1月14日）となる。

³⁰ 初回開催時から現在までこの体制は変わっていない。セイジ・オザワ 松本フェスティバル公式ホームページ「'92 SKF レポート」<https://www.ozawa-festival.com/>（2021年4月25日閲覧）。

³¹ 芸術家会議（1993）『国内外の芸術フェスティバルに関する実態調査Ⅱ 報告書』（調査機関：ニッセイ基礎研究所都市開発部）、239頁、244頁。

³² 1995年時点での総事業費は、PMFが約7億9千6百万円、サイトウ・キネン・フェスティバルが約7億円、東京国際演劇祭が約3億6千万円、名古屋国際音楽祭が約2億1千万円と、当時のフェスティバルの中でも、群を抜いてPMFとサイトウ・キネン・フェスティバルの総事業費が高い。1995年当時のサイトウ・キネン・フェスティバルの事業費は、海外のフェスティバルを例に挙げると、タングルウッド・フェスティバル（約7億6千万円）やエディンバラ国際フェスティバル（6億5千万円）の規模に近い。芸術家会議（1995）『国内外の芸術フェスティバルに関する実態調査Ⅱ 報告書』（調査機関：ニッセイ基礎研究所都市開発部）、33頁。

され、5月11日に「'92 サイトウ・キネン・フェスティバル 松本」実行委員会が発足、同月1日に文部省より設置許可が下りていた財団法人サイトウ・キネン財団とともに、第一回財団法人サイトウ・キネン財団理事会在松本で開催された。さらに6月12日には松本市国際音楽祭推進庁内連絡会議、続く7月6日に松本市国際音楽祭推進団体協議会が発足し、運営体制が整えられていくこととなる³³。



【図1】 『'92 サイトウ・キネン・フェスティバル松本』、94頁より転載

第一回サイトウ・キネン・フェスティバルの組織図を確認する（【図1】³⁴）と、財団法人サイトウ・キネン財団に始まるトップダウン方式であり、財団の下に位置する実行委員会を受けるかたちで実施本部が置かれていることがわかる。ただし、立ち上げから初回開催に際して実際の現場を動かしたのは主に実施本部以下であり、そのなかに長野県や松本市のような行政機関が含まれている。さらに並列して置かれた長野県および松本市以下には、松本市国際音楽祭推進団体協議会、また事務局・政策局・管理局（管轄は長野県）・運営局（管轄は松本市）が置かれており、松本市は歓迎吹奏楽パレードなど、特に関連イベントの運営や

³³ 松本市編（1997）『松本市史 第二巻歴史編Ⅳ 現代』、975頁。

³⁴ 松本市国際音楽祭推進団体協議会『'92 サイトウ・キネン・フェスティバル松本』、94頁。

実施を担っていた。複数の担当部署が横断しながらフェスティバルを支える体制が、資料から追える範囲であるが、5か月足らずで構築されていったことが見えてくる。ただし、当時、松本市職員として実施本部員を務め各種事業を牽引した赤廣三郎が証言しているように、実際には「世間に向けて92年からフェスティバルをやる」と宣言したのが91年11月15日。ということは、その時点までにいろいろな計画が決まっているということ³⁵であり、小澤がフェスティバル候補地選定に1990年に松本を訪れて以降³⁶、少しずつ着実に準備が進められていったとみるべきであろう。

民間企業の立場から主導したのは、セイコー・エプソン株式会社をはじめとする協賛企業であった。同社は、フェスティバルに先駆けて1989年からサイトウ・キネン・オーケストラに対して経済支援を行っていたが³⁷、この時の支援はサイトウ・キネン・オーケストラの海外ツアー挙行に際して行われたものであった。ただしフェスティバルに対しても同様の支援をおこなっており、初回から現在まで続く主要な協賛企業のひとつとなっている。なお同社に勤務し、フェスティバル開催時、実施本部の事務局長として運営の中核をなした武井勇二は、1993年の時点でセイコー・エプソンの支援として、4年間で5億円までの見込みがたっていることを述べており³⁸、このことから、フェスティバルの将来を見越した支援計画が民間企業においてなされていたことがわかる。

市民の立場からの参画として、まず挙げられるのが、先行研究でも言及されていたボランティア組織³⁹である。フェスティバル運営の一端を担ってきた市民ボランティアの母体となったのが、先述した松本市音楽文化ホール（ザ・ハーモニーホール）の運営グループであるハーモニーメイトであった。彼らは、当時の自治体によるホール運営の状況に鑑み、「役人のホールから市民のホールへの転換」を目指した有志の市民によって構成され、同ホール開館の翌年にあたる1986年に活動を開始した。当時これをとりまとめていた青山織人は、後にサイトウ・キネン・フェスティバルのボランティア組織をまとめあげることになるのだが、青山によると、初回のサイトウ・キネン・フェスティバル開催に際し、ハーモニーメイ

³⁵ 安藤行宥、茂原奈保子、田中大暉、濱崎友絵 編著（2020）『信州大学×セイジ・オザワ 松本フェスティバル実行委員会 連携プロジェクト —こうしてフェスティバルは始まった— OMF 研究ゼミ：インタビューからみるその原点 実施報告書 2019年度（2018年度増補改訂版）』、32頁。

³⁶ 同前、33頁。

³⁷ 同前、41-42頁。

³⁸ 芸術家会議（1993）『国内外の芸術フェスティバルに関する実態調査Ⅱ 報告書』（調査機関：ニッセイ基礎研究所都市開発部）、244頁。

³⁹ 文化芸術とボランティアとの関係は、1955年頃（昭和30年代）から美術館に見られたボランティア活動に端を発し、1974年に北九州市立美術館で初めて公募により導入されたことが大きな節目となった。音楽や美術などの文化芸術に年齢を問わずに親しむ機会を持ち、心を豊かにする環境を創造することを目的とした「文化ボランティア」は、2002年に文化庁長官に就任した河合隼雄の施策によって日本全国に普及してきた背景をもつ。なお第2章との関連で付言すれば、スポーツイベントにおいてボランティアが公募され、初めて組織的に活躍したのは1985年の「ユニバーシアード神戸」でのことであった。そもそも人々とスポーツへの関わりは、自身が行う「するスポーツ」、観戦を行う「みるスポーツ」というふたつの側面から年々増加傾向にあったが、これに加え2000年代に入ってから「ささえるスポーツ」という形態も注目されるようになってきているという。岡本榮一、石田易司、牧口明編著（2014）『日本ボランティア・NPO・市民活動年表』明石書店、217頁；大久保邦子（2004）『文化ボランティアガイド』日本標準、8-14頁；山口泰雄編（2004）『スポーツ・ボランティアへの招待—新しいスポーツ文化の可能性』世界思想社、2-5頁。

トから24人がボランティアにあたったという。そこで目指されたのは、ボランティアといえどコンサート当日の会場運営スタッフのような役割にとどまらず、催しの企画運営を行うなど、ホールの運営に能動的に関わる立場であった。なお、当時は音楽祭にボランティアが関わることは珍しく報道でも大々的に取り上げられ、初年度にはおよそ800名、翌年の第2回開催時には1,000人規模の組織にまで成長した⁴⁰。

以上、概要をみてきたとおり、行政、民間企業、市民ともに、それぞれの立場から1992年当時のフェスティバルに関わり、松本が一種の音楽を介した「アゴラ（広場）」として人々の活動の拠点となっていたことがわかる。

また、こうした「場」に欠かせない要素として看過できないのが、フェスティバルを受け入れるハードウェア、つまりホールの存在である。

松本市には現在、音楽や舞台の上演に特化した行政運営のホールが3館ある。松本市音楽文化ホール、キッセイ文化ホール（長野県松本文化会館）、まつもと市民芸術館である。松本市音楽文化ホールが1985年にクラシックに特化して、フェスティバルに先駆けて建設されたことは先述したとおりであるが⁴¹、フェスティバル開催に際して大きな鍵を握ったのは、1992年7月に竣工した、2,000席を有する長野県松本文化会館（現キッセイ文化ホール）であった。建設にあたっては、小澤の意向が反映され、建設途中ではあったが、本格的なオペラ上演に対応できるよう部分的な設計変更がおこなわれたという⁴²。なおこのホールにおいて、第1回サイトウ・キネン・フェスティバルを代表する作品となったオペラ《エディプス王》が上演されることになる。さらに2004年には、舞台上演に特化した、まつもと市民芸術館が竣工した。これもまた、フェスティバルでのオペラ上演に適した構造と設備を持つものであった。

幕が開く——第1回フェスティバル（1992年）

行政・民間企業・市民、そしてホール建設が組み合わさった結果として1992年9月5日から15日にかけての11日間、第1回サイトウ・キネン・フェスティバル松本は開幕した。同フェスティバルは、松本市（行政・市民）が主体となって開催するイベントと、サイトウ・キネン・オーケストラが主体となって行う演奏会との二つに大別される。

開催地の行政機関である松本市は、「市民の各種団体による受け入れ組織を発足してこの音楽祭を支援し、音楽都市松本にふさわしい音楽文化の振興に努めます」⁴³と述べているよ

⁴⁰ フェスティバルにおけるボランティアの存在は現在に至るまで重要な位置を占めており、またフェスティバルを特徴付けてきた要因のひとつでもある。安藤行春、茂原奈保子、田中大暉、濱崎友絵 編著、前掲書、36-38頁。

⁴¹ 当該ホールは1955年頃に全国で一斉に建設された公共ホールの建て替え時期にあたって建設されたものであった。このとき各地で従来の多目的ホールではなく目的を絞った専門ホールへの転換が目指されており、松本市にもクラシックの生演奏を柱にしたホールを建設することが決まり、ホール運営の根本的な転換を促した。これにより、松本市音楽文化ホールは、貸館ではなくホールの「自主企画」を行うという当時としては斬新な方針がとられることになる。同時期に市の総合体育館を完成させた松本市は、こうしたホールや施設の活用をも構想し、前章でも述べた「音楽とスポーツ都市宣言」を1985年におこなった。

⁴² 芸術家会議（1993）『国内外の芸術フェスティバルに関する実態調査Ⅱ 報告書』（調査機関：ニッセイ基礎研究所都市開発部）、246頁。

うに、オーケストラの支援と並び、主に「関連イベント」の創出を通じてフェスティバルに関与した。「松本にふさわしい」という一文には、松本市側の「単に場所貸しだけにはしたくないという思いはあった」⁴⁴との意識が垣間見える。一方、海外での活動を主としていたサイトウ・キネン・オーケストラにとって、このフェスティバルでの演奏は日本における初の活動であり、「世界に向けて日本の西洋音楽を発信」⁴⁵することが一つの目的として認識されていた。

松本市は、音楽祭の雰囲気盛り上げるため、また単なる場所貸し状態に陥ることを防ぐため、「関連イベント」として三つのイベント、「フェスティバル展」「歓迎 吹奏楽パレード」「子供のための音楽会」を催した。

フェスティバル展は、「斎藤秀雄とオーケストラ」と題して行われた。斎藤秀雄氏とオーケストラの歩みやフェスティバルの内容を、ビデオやLDによって一般に周知した。この展示は、長野県松本文化会館ロビー一階にて、8月22日から9月2日まで行われた。

8月30日には「歓迎 吹奏楽パレード」と、それに付随した合同演奏が実施された。地元中学校8校、高校5校の吹奏楽部が参加したほか、信州大学吹奏楽団や地元マーチングバンド、ボーイスカウトやガールスカウト、松本市消防音楽隊など、計22の地元団体⁴⁶、人数にして約1,200人が参加している⁴⁷。パレードは、松本の玄関口である松本駅から出発し、吹奏楽を響かせながら松本市中心部を行進した後、松本城敷地内の本丸庭園に集合した。演奏者たちは、小澤征爾の指揮のもと合同演奏を行い、松本城天守を背景に県歌「信濃の国」を演奏、庭園内には小澤の手によるコウヤマキの記念植樹がおこなわれ、サイトウ・キネン・フェスティバルは松本の地に深く印象付けられたのであった。

9月8日には、松本市の主催により、松本市総合体育館・メインアリーナにおいて「子供のための音楽会」が開催された。パンフレットは「君たちにこそ、最高の音楽をプレゼントしたい!!」⁴⁸との見出しで書き出され、小澤征爾とサイトウ・キネン・オーケストラから子供たちへ音楽のプレゼントを渡すという位置づけで開催された。県内全域から招待された小学6年生に、モーツァルト《セレナード第13番 ト長調 K.525 “Eine kleine Nachtmusik”》、J.S. バッハ/斎藤秀雄編曲《シャコンヌ》、ブラームス《交響曲第1番 ハ短調》の演奏が贈られた。また、オーケストラの演奏とあわせて、子供たちは「赤とんぼ」を合唱した⁴⁹。

一方、オーケストラが主体として行うイベントについては、総監督である小澤征爾を中心として内容が検討された。ステージの上でなされることは、「小澤さんの意向がすべて。それ以外になにもない」⁵⁰と赤廣が言及するように、松本市はほとんど手を加えず、小澤の意

⁴³ 同前、4頁。

⁴⁴ 茂原奈保子、田中大暉、濱崎友絵 編著（2019）『こうしてフェスティバルは始まった OMF 研究ゼミ：インタビューからみるその原点 実施報告書 2018年度』信州大学人文学部、18頁。

⁴⁵ 「この秋松本は音楽に染まる サイトウ・キネン・フェスティバル松本 概要が決定しました」、『広報まつもと』1992年5月15日号 松本市役所、4頁。

⁴⁶ パンフレット「'92 SAITO KINEN FESTIVAL MATSUMOTO『歓迎 吹奏楽パレード』国宝松本城合同演奏会」より。

⁴⁷ パンフレット（1992）「斎藤秀雄とオーケストラ」より。

⁴⁸ パンフレット（1992）「サイトウ・キネン・オーケストラ 子供のための音楽会」より。

⁴⁹ 同前パンフレット（1992）より。

図を実現するよう協力体制を敷いていた。結果として、サイトウ・キネン・オーケストラによる公演は「オーケストラ演奏会」「オペラ公演」「室内楽演奏会」の三つと、オペラ公演のソプラノを務めるジェシー・ノーマンによる「J. ノーマン リサイタル」をあわせた計4本立てとなった⁵¹。曲目⁵²の一部、とくにモーツァルト《ディヴェルティメント ニ長調 K.136》とJ.S. バッハ／斎藤秀雄編曲《シャコンヌ》は桐朋学園大学において斎藤秀雄氏に指導を受けた演奏者にとって思い出深いものであった。奏者の多くは桐朋学園大学において共通の演奏上の作法、いわば「同じ文法」⁵³を習っていたために、限られた練習期間の中でも質の高い演奏に到達することができた⁵⁴。小澤の求心力と、奏者たちの繋がり深さが、世界第一級の演奏となってステージの上で結実したといえる。

以上が第1回サイトウ・キネン・フェスティバルの概観である。松本市が主体となって行う「関連イベント」は、地域側から音楽祭に積極的に関与する意図が随所に見え、イベントの内容や開催場所にその意図が見て取れる。一方、オーケストラ主催のコンサートは、日本から世界最高峰の西洋音楽を発信するという一つの目的があった。奏者の多くは桐朋学園大学時代からの繋がりによって集結したものであり、それは曲目の選択にも象徴されていると考えられる。

4. 「地域参加型」フェスティバルへ——吹奏楽パレード・合同演奏会の立案をめぐる

以上のイベントのうち、市民自らが音楽を発信する場を設ける「市民による音楽発表の場としてのSKF」（小泉：2009）にあたるものが、約1,200人の一般市民が演奏者としてフェスティバルに参加した吹奏楽パレードと合同演奏会である。本章では、とくに吹奏楽パレードに焦点を当て、このイベントがどのように計画され実施されたのか、またフェスティバルと松本との結節点を創出する上でどのような役割を演じたのか、当時の行政資料を基礎として検討する。

1992年4月1日にサイトウ・キネン・フェスティバル松本推進事務局によって作成された「'92 サイトウ・キネン・フェスティバル松本推進計画」において、フェスティバルの大枠は決定されていた。その実施内容には、サイトウ・キネン・オーケストラが主体となって開催する(1)オーケストラコンサート、(2)オペラ公演、(3)リサイタルおよび室内楽、並びに、松本市主催による(4)関連イベントの計4つが明記された。そのうち(4)関連イベントについては、先述したとおり①フェスティバル展（オペラ衣装展）、②吹奏楽パレード（市中パレー

⁵⁰ 茂原奈保子、田中大暉、濱崎友絵 編著（2019）、前掲報告書、18-19頁。

⁵¹ 「この秋松本は音楽に染まる サイトウ・キネン・フェスティバル松本 概要が決定しました」、『広報まつもと』1992年5月15日号 松本市役所、4頁。

⁵² 曲目については、オーケストラ演奏会は武満徹《セレモニアル》、モーツァルト《ディヴェルティメント ニ長調 K.136》、チャイコフスキー《弦楽のためのセレナード ハ長調 作品48》、ブラームス《交響曲第1番 ハ短調》が演目として選択され、オペラ演奏会はJ.S. バッハ／斎藤秀雄編曲《シャコンヌ》、ストラヴィンスキー《エディプス王》が選択された。「この秋松本は音楽に染まる サイトウ・キネン・フェスティバル松本 概要が決定しました」、『広報まつもと』1992年5月15日号 松本市役所、4頁。

⁵³ 茂原奈保子、田中大暉、濱崎友絵 編著（2019）、前掲報告書、30頁。

⁵⁴ 同前、30頁。

ド)、③子供のための音楽会の三本立てで計画されていた。

上記②の吹奏楽パレードは、主催は松本市・松本市教育委員会、主管は国際音楽祭推進団体協議会、実施主体はSKF 歓迎吹奏楽パレード実行委員会として実施された⁵⁵。つまり本事業は、すべて松本市が主導する形をとっており、市がフェスティバルに能動的に働きかけるためのファクターのひとつとして位置付けられていたことがわかる。行政の立場から吹奏楽パレードを牽引した赤廣によると、この関連イベントは、松本市が地域や市民がいかに携わることができるかを思案するなかで実施を決定したものだという⁵⁶。また、小澤征爾も子どもとの関わりについて深い関心を持っており、子どもを対象とした音楽会開催を希望し、またフェスティバルに関わった子供たちのなかからプレイヤーが育っていけば、という願いも持っていた。よって、松本市の主催事業として、吹奏楽パレードおよび子供のための音楽会の開催が決定したのである。

吹奏楽パレードにかかわる行政資料は、A4判およびA3判合わせて50枚ほど残されており、その中でもっとも早い日付である1992年5月2日の国際音楽推進室による報告書には「サイトウ・キネン・フェスティバル 吹奏楽歓迎パレード計画書（案）」が資料として添付され、この頃から実施の具体性についての検討が始められていたことがわかる。その後はとくに「吹奏楽パレード」のために議論が行われていたことが複数の資料から読み取れる。資料中では「市内吹奏楽パレード」「歓迎パレード」「歓迎 吹奏楽パレード」と表記がゆれており、名称が統一されないまま、短時間のうちに実施された当時の形跡がうかがえる。

この吹奏楽パレードの趣旨は、「サイトウ・キネン・フェスティバルの開催を歓迎し、吹奏楽による歓迎パレード及び合同演奏を行いフェスティバルの雰囲気盛り上げつつ、市民の関心を高めようとするもの」⁵⁷であった。先述したように、サイトウ・キネン・オーケストラが「世界に向けて日本の西洋音楽を発信」⁵⁸することを大きな目的として持っていたのに対し、市中パレードは開催地を中心とした一般市民が奏者としてフェスティバルに関与すること自体が一つの目的として認識されていた。

1992年6月9日の『「歓迎 吹奏楽パレード」説明会』は、パレード参加予定の関係者に対し、行政担当者がその内容について説明を行なったものであるが、その際、どの程度練習すればよいのかとの質問に対し、「今回のパレードの意義の中には、世界の小澤の指揮で演奏できるという夢も含まれている。従って、レベル的なことはあまり問題にしたくない。出来、不出来の問題ではなく、是非、参加してほしい」⁵⁹との回答がなされていることから、その趣旨がうかがえる。

しかし、パレードの経験がない団体がほとんどの中、吹奏楽パレードへの参加を不安視する声も上がった。とくに問題になったのは、パレードに必要な楽器が不足しているという指摘である。報告書には、「マーチングのための楽器はどうするのか。松本市で予算をとって

⁵⁵ 松本市行政文書（1992年5月7日）「報告書 市長説明会 平成4年5月3日」

⁵⁶ 赤廣三郎氏とのインタビュー（2021年1月9日）に基づく。

⁵⁷ 松本市行政文書（日付記載なし）「サイトウ・キネン・フェスティバル 吹奏楽歓迎パレード計画書（案）」

⁵⁸ 「この秋松本は音楽に染まる サイトウ・キネン・フェスティバル松本 概要が決定しました」、『広報まつもと』1992年5月15日号 松本市役所、4頁。

⁵⁹ 松本市行政文書（1992年6月10日）「報告書『歓迎 吹奏楽パレード』説明会 平成4年6月9日」。

購入してもらえるのか」という質問、および「楽器等の準備については、出来るだけ協力したい」という回答が記載されている⁶⁰。つまり、初回開催の段階では十分な数の楽器が用意された状態ではなかったということがここからみえてくる。また、団体ごとの問題点として、高校吹奏楽部関係者からは「パレードの経験がなく、楽器もない」⁶¹、一般団体関係者からは「楽器がない（3団体）、ある（3団体）」「楽器があればパレードに協力したい（約205名）」との声が寄せられたことが記録されている⁶²。

楽器が足りないとの指摘を踏まえ、6月23日に行われた『『歓迎 吹奏楽パレード』第1回準備会』では、「パレード用の楽器で各団体が所有していないものは、推進室が把握し手配、対応する」「楽器数、個数については参加団体が決定次第打合せをし、全体調整はその後行う」⁶³との決定がされた。続く「報告書『歓迎 吹奏楽パレード』第2回準備会』では、「楽器レンタルの件、ヤマハのご協力をいただき新品をレンタルしてもらった」⁶⁴ことが記録され、楽器を迅速に手配したことがわかる。手配された楽器の内訳は、主にヤマハからスーザフォン12台、バスドラム15台、スネアドラム15台、クォード4台、シンバル4台⁶⁵である⁶⁶。また、「備品」としてポール80本、ドラムメジャー20本⁶⁷を手配した⁶⁸。当時の楽器不足は、このようにヤマハ株式会社や長野市の学校から無償で借り受けることで解決していった⁶⁹。なお松本市は翌年度以降は予算を組んで楽器を購入し、市内の小中学校に徐々に配備していったという⁷⁰。

また同日、手配した楽器の振り分け先も【表2】のように決定されており、それによれば各団体にスーザフォンを一台ずつ、その他の楽器も概ね一台ずつ貸与されるよう計画された⁷¹。これをみると、吹奏楽部や吹奏楽団がマーチングを行うにあたって、チューバ奏者がスーザフォンに持ち替えることを想定したものと推測できる。マーチングを行うにあたって楽器が足りないという上述の指摘は、普段はマーチングを行わない団体であるためにスーザフォンやマーチング用ドラムセットを所有していないという意味であったとの推測も可能だ。

⁶⁰ 同前。

⁶¹ 同前。

⁶² 同前。

⁶³ 松本市行政文書（1992年6月24日）「報告書『歓迎 吹奏楽パレード』第1回準備会 平成4年6月23日」。

⁶⁴ 松本市行政文書（1992年7月10日）「報告書『歓迎 吹奏楽パレード』第2回準備会 平成4年7月8日」。

⁶⁵ バスドラム、スネアドラム、クォードはそれぞれキャリングホルダー、マレット付。また、クォード1台はシティーマーチングから貸与。ただしスティックは各団体で用意が求められた。また、シンバル3台は鎌田中学校から貸与された。

⁶⁶ 松本市行政文書（1992年7月10日）「報告書『歓迎 吹奏楽パレード』第2回準備会 平成4年7月8日」。

⁶⁷ ポールは、日本パレードから20本、みさとジュニアとボーイスカウトからそれぞれ30本提供された。ドラムメジャーは日本パレードから提供された。

⁶⁸ 同上。

⁶⁹ 赤廣氏インタビュー（2021年1月9日）より。このときヤマハ株式会社は市中パレードの協賛企業として名を連ねている。

⁷⁰ 赤廣氏インタビュー（2021年1月9日）より。

	学 校 名	内 訳
中 学 校	清 水 中 学 校	スーザホン1, スネアドラム1, バスドラム1
	鎌 田 中 学 校	スーザホン1, スネアドラム1, バスドラム1
	旭 町 中 学 校	スーザホン1, スネアドラム1, バスドラム1, クォード 1
	松 島 中 学 校	スーザホン1, スネアドラム2, バスドラム2, クォード 1
	菅 野 中 学 校	スーザホン1, スネアドラム2, バスドラム2, クォード 1
	筑 摩 野 中 学 校	スーザホン1, スネアドラム1, バスドラム1
	女 鳥 羽 中 学 校	スーザホン1, スネアドラム2, バスドラム2, クォード 1
	信大付属中学校	スーザホン1, スネアドラム1, バスドラム1
	鉢 盛 中 学 校	スーザホン1, スネアドラム1, バスドラム1
高 校	松本県ヶ丘高校	スネアドラム1, バスドラム1
	田 川 高 校	スーザホン1, スネアドラム1, バスドラム1
	明科・松南高校	スーザホン1, スネアドラム1, バスドラム1
一 般	松本市民吹奏楽団	スーザホン1, バスドラム1, シンバル1

【表2】 レンタル楽器の振り分け先。

出典：松本市行政文書（1992年7月10日）「報告書『歓迎 吹奏楽パレード』第2回準備会 平成4年7月8日」

8月1日に行われた中・高合同練習においては、「練習はイスなしで行うが、チューバ用の椅子は用意する。（スーザホン〔スーザフォン〕間に合わないため）」⁷¹と記載があり、スーザフォンをチューバ奏者が担当していたことが読み取れる。逆に言えば、一団体あたりスーザフォンと打楽器数台を揃えればマーチングの実現が可能であったことを指摘できる。

⁷¹ このうち鉢盛中学校が辞退したため、鉢盛中学校に振り分けられる予定だったスーザフォン1台が松本県ヶ丘高校へ、バスドラム1台・スネアドラム1台が県陵（松本県ヶ丘高校の吹奏楽部）OBへ追加貸与となった。松本市行政文書（1992年7月22日）「報告書『歓迎 吹奏楽パレード』第3回幹事会 平成4年7月21日」。

⁷² 松本市行政文書（1992年7月22日）「報告書『歓迎 吹奏楽パレード』第3回幹事会 平成4年7月21日」。

もっとも、当時の松本市内の吹奏楽各団体がどれだけ柔軟にマーチングに対応できたかについては、より詳細な調査が求められるだろう。

結果としてパレードに参加した演奏者は、松本の中学、高校、大学の吹奏楽部を中心とした計22の吹奏楽団体であり⁷³、人数にして約1,200人を数えた⁷⁴。この人数は、フェスティバルの中心であるサイトウ・キネン・オーケストラのメンバーの実に十倍以上である。5月2日の計画書（案）では参加人数を1,000人程度見込んでいたため、計画以上の結果を生んだといえよう。なおこの人数の内訳は、中学校8校288人、高校5校175人、大学・一般7団体178人、ボーイスカウト7団体368人、ガールスカウト5団体90人である⁷⁵。

フェスティバル当日の配布のパンフレットには、「音楽の訪れを音楽で歓迎できる 小澤征爾さんの指揮棒の先を伝って 一体となれる瞬間の喜びは 私たちの心から永遠に消えることはない」⁷⁶と記されている。吹奏楽パレードは、本フェスティバルにおいて松本側が演奏者としてフェスティバルに参加できるほとんど唯一の機会である。地元ボランティアが運営に携わることとあわせて、一般市民や学生が演奏面に携わることによって、より直接的に地域と音楽祭との接点を創出したとも捉えられる。

また、パレードの経路設計の経緯は行政資料上に残っていないが、開催地としての松本を印象づけるために効果的な道が選択されたもの考えられる。パレードの出発地は松本駅に設定され、駅前大通を一車線通行止めにして行進し、松本をフェスティバル一色に染め上げた。行進は、松本中心部として馴染み深い国分町、本町、大名町を通り抜け、松本城二の門へと集結する。引き続いての合同演奏は松本城本丸庭園内にて行われ、観客や参加者は、国宝・松本城天守閣を必ず目にする事となる。松本の象徴である天守閣を背景に地域の一般市民約1,200人が集結し、小澤征爾の指揮によって県歌「信濃の国」を演奏・合唱することは、松本とサイトウ・キネン・オーケストラとの間に分かち難い絆が結ばれたことを象徴的に示している。

上述の通り、吹奏楽パレードには松本市にフェスティバルの開催を周知する以上の意義があった。第一には、一般市民の音楽への参加であり、この点はボランティアの運営参加と近い目的があったと考えられる。世界一流の演奏家を招聘し、その演奏を一方的に享受するのみともなりかねない音楽祭において、一般市民の奏者にも主体的に音楽を発信できる場を設けたことに、市中パレードの意義があった。第二には、パレードの形態をとって行進することによって、松本の地とフェスティバルとを分かち難く結びつけた。パレードのフィナーレである合同演奏では、音楽祭と開催地、サイトウ・キネン・オーケストラと地域の演奏者たちという、二つの要素が巧みに融和され、街をあげての祝祭感を醸し出した。サイトウ・キネン・フェスティバルが松本と分かちがたい関係性を構築し、今日に至るまで求心力を維

⁷³ パンフレット（1992）「'92 SAITO KINEN FESTIVAL MATSUMOTO『歓迎 吹奏楽パレード』国宝松本城合同演奏会」より。

⁷⁴ パンフレット（1992）「斎藤秀雄とオーケストラ」より。

⁷⁵ サイトウ・キネン・フェスティバル 松本実行委員会『'92 サイトウ・キネン・フェスティバル松本』、96頁。

⁷⁶ パンフレット（1992）「'92 SAITO KINEN FESTIVAL MATSUMOTO『歓迎 吹奏楽パレード』国宝松本城合同演奏会」より。

持っている背景には、このような吹奏楽パレードの計画の巧みさを挙げることができる。

試行錯誤の末に開催された初年度のフェスティバルにおける吹奏楽パレードは、次回のフェスティバルに向けておおよその道筋をつけたものとなった。1993年2月19日に行われた「『歓迎 吹奏楽パレード』第1回幹事会」においては、初年度の市中パレードは「とにかく大成功でよかった／楽器の問題等、いい形で影響がでた／これをきっかけに、地域のレベルアップにつなげ、昨年以上のものを今年も作りあげてほしい／フェスティバル本番ばかりでなく、関連事業もともに定着させたい」⁷⁷との高橋次長の挨拶が記録されている。続く1993年3月2日に行われた「'93 サイトウ・キネン・フェスティバル松本『歓迎 吹奏楽パレード』説明会」においては、吹奏楽団体関係者に対して、「(前略)SKF開催を支援する地元としてのステージ作り、音楽文化振興という面でも昨年のパレードは大きな意味をもつイベントの1つでもあった／楽器の問題等、いい形で波及効果もあり、インパクトも大きかった／行政としても出来る限りの協力をするので、皆さんで昨年以上のものを今年も作りあげてほしい」⁷⁸との坪田室長の挨拶があった。いずれも、初回の吹奏楽パレードを大成功として認識し、次回の吹奏楽パレードの開催に向けた意欲に満ちている。同日の説明会では、行政からのみならず、参加者からも「ほとんどの団体が初めてで、最初パレードは絶対無理だと思った。でも出来た。この事実はいまだに信じられない程。挑戦してみても良かった。(県ヶ丘高)」⁷⁹、「自分自身は経験があったが、団体としてはレベルが低いのではと心配だった。でも、“やれば出来る”というのが実感。曲を仕上げ、暗譜し、隊列を組み、歩く練習をすれば、なんとか形になる物だと思った。何よりも、大勢の人に見られているという快感を生徒達を感じた。これだけはやった者でなければわからない。とにかく思い切ってやってみることだと思う。(鎌田中)」⁸⁰との意見があった。これらを見ると、行政・市民の両者が主体的にパレードに参加し、フェスティバルとの関わりを形成していたことがわかる。以降、吹奏楽パレードは、「出たい人が出て楽しむことが一番。どんなレベルでも構わない。むしろ、これが、全体のレベルアップにつながり、興味をもってもらうことが大事。(高橋次長)」⁸¹との行政の目標の通り、一般市民が演奏者として音楽祭に参加する場として、サイトウ・キネン・フェスティバルの毎夏のイベントとして定着していった。

さらに、市内の小中学校の音楽教育に少なからず影響を与えてきた点にも意義を見出すことができるだろう。初回は規模や予算への懸念から小学生の参加はなかったが、現在、吹奏楽パレードの主軸を担うのは小中学校である。先述の通り市中パレードへの学校の参加は、行政による楽器の配備や先生方の協力によって実現することができた。とくに教員にとっては学校外の業務として担わなければならないため積極性が求められ、この事業に携わりたいとの希望をもつ県内の教員から松本市の学校への異動希望が増加し、小中学校における吹奏

⁷⁷ 松本市行政文書（1993年2月23日）「報告書『歓迎 吹奏楽パレード』第1回幹事会 平成5年2月19日」。

⁷⁸ 松本市行政文書（1993年3月3日）「報告書 '93 サイトウ・キネン・フェスティバル 松本『歓迎 吹奏楽パレード』説明会 平成5年3月2日」。

⁷⁹ 同上。

⁸⁰ 同上。

⁸¹ 同上。

楽の指導が充実する結果をもたらしたという⁸²。このような遅効性の成果のひとつである子供や教育との間接的な関わりについては、さらなる調査を進める必要があるだろう。

結びとして

以上、本稿では、サイトウ・キネン・フェスティバルの創成期に主に焦点を当て、松本という開催地の文脈で、フェスティバルが松本にいかに関わりつけられ、そこで何が起っていったのかという点について検討してきた。

第1章では、音楽祭と地域との関連性にかかわる先行研究から、セイジ・オザワ 松本フェスティバルが、1990年代の「音楽祭－開催地」の結びつきを問う潮流上に創設されていったことを確認した。続く第2章では、「音楽」と「スポーツ」という一見、関連性が希薄に映る二つの要素をめぐる、ともに松本市において戦後から1980年代にかけて推進され、「市民への浸透」と「祝祭性」を共通分母としてフェスティバルを受け入れる「土壌」を形成していったことを指摘した。この文脈上で第3章において整理したのは、1992年に開催されたサイトウ・キネン・フェスティバルが、行政、民間企業、市民という三者を結びつけ、松本に音楽を介した一種の「アゴラ（広場）」を成立させていった側面である。第4章で松本市行政文書から明らかとなったのは、何度も議論を繰り返す、行政、地元の学校の先生方や企業などが連携を図りながら、楽器不足を乗り越え、手探りで市中パレードを成功へと導いていった姿そのものであった。ここで確認したのは、第1回フェスティバルは、小澤征爾とサイトウ・キネン・オーケストラが祝祭性を体現していったが、松本市が主催した吹奏楽パレードは、祝祭性と同時に「日常性」への回路となり、人々が能動的にフェスティバルへ参加する契機を生み出していったとみることができるとのである。

以上の観点からあらためてサイトウ・キネン・フェスティバルの創設と「松本」との関係性をみると、そこには音楽祭の系譜としてのフェスティバルと、松本市として歩んできた文化的土壌と、人が結びつく「結節点」が見えてくる。現在におけるセイジ・オザワ 松本フェスティバルが「地域参加型」と評されるのは、こうした複合的な視角が交差するがゆえであると考えられる。

【付記】

本稿は、茂原および田中が、第1章（田中）、第2章（茂原）、第3章（茂原、田中）、第4章（田中）を担当し、濱崎がその他および第1章から第4章を通じた加筆・修正をおこなっている。

【謝辞】

本稿執筆にあたっては、関連行政資料の閲覧をご許可いただいた元セイジ・オザワ 松本フェスティバル実行委員会事務局長の藤森誠氏、現同実行委員会事務局長の松林典泰氏、および2度（2018年および2020年）にわたるインタビューをご快諾くださった赤廣三郎氏（現

⁸² 2021年1月9日赤廣氏インタビューより。

松本商工会議所 専務理事）に大変お世話になりました。また松本市音楽文化ホール・プロデューサーの中村ひろ子氏より同ホールに関する貴重な資料提供を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。また2018年度および2019年度の報告書においてインタビューに快く応じてくださった方々にお世話になった方々にも、この場を借りて御礼申し上げます。（以下、五十音順）

青山織人 氏（未来学舎理事長）

武井勇二 氏（セイジ・オザワ 松本フェスティバル 総合コーディネーター）

猶井正幸 氏（SKO・ホルン奏者、セイジ・オザワ 松本フェスティバル実行委員）

野沢藤司 氏（富士山河口湖音楽祭実行委員会事務局長、河口湖ステラシアターマネージャー）

萩原 透 氏（ホクト文化ホール 副館長兼事業課長）

堀 伝 氏（サイトウ・キネン財団理事長、SKO・ヴァイオリン奏者）

森安 淳 氏（Office・MORIYASU Co., Ltd. 代表、OMF 元エグゼクティブ・オペラ・プロデューサー）

<引用文献一覧>

伊志嶺絵里子（2006）「日本の音楽祭の活動状況とマネジメントに関する一考察 —市民参加、協働のあり方について—」『文化経済学 5(1)』文化経済学会 83-93頁.

大久保邦子（2004）『文化ボランティアガイド』日本標準.

岡本榮一 石田易司、牧口明編著（2014）『日本ボランティア・NPO・市民活動年表』明石書店.

小澤幹夫（1993）『松本にブラームスが流れた日——小澤征爾とサイトウ・キネン・オーケストラ』新潮社.

久保田慶一（2001）「わが国の音楽祭の現状と『音楽祭サミット』」平成12年度調査委員会報告書『日本の音楽祭・フェスティバル』財団法人音楽文化創造.

熊田知晃（2018）「文化行政の専門性に関する研究 霧島国際音楽祭を事例に」『政治経済学研究論集 3』明治大学大学院 57-74頁.

小泉元宏（2009）「市民社会との関わりから見た音楽祭研究に向けて—『サイトウ・キネン・フェスティバル松本』における市民社会との関わりを事例として—」『音楽教育学 39(2)』、12-24頁.

定藤博子（2019）「霧島国際音楽祭の誕生と成長：産・官・民の地域イベントへの参加」『地域総合研究 46(2)』、55-65頁.

茂原奈保子、田中大暉、濱崎友絵（2019）『こうしてフェスティバルは始まった OMF 研究ゼミ：インタビューからみるその原点 実施報告書 2018年度』信州大学人文学部.

新藤浩伸（2004）「住民ボランティアによる地域音楽祭の創造」『東京大学大学院教育学研究科紀要 43』343-353頁.

松本市編（1997）『松本市史 第二巻歴史編Ⅳ 現代』.

山本美紀（2003）「戦後の日本における国際音楽祭の受容に関する一考察」『文化経済学 3(3)』、65-75頁.

中川幾郎（2001）『分権時代の自治体文化政策 ハコモノづくりから総合政策評価に向けて』勁草書房.

山口泰雄編（2004）『スポーツ・ボランティアへの招待—新しいスポーツ文化の可能性』世界思想社。

<松本市行政文書>

「報告書 市長説明会 平成4年5月3日」1992年5月7日
「報告書 松本シティ・マーチング・バンド結成に伴うイベント協力について 平成4年5月14日」
1992年5月14日
「報告書『歓迎 吹奏楽パレード』説明会 平成4年6月9日」1992年6月10日
「報告書『歓迎 吹奏楽パレード』第1回準備会 平成4年6月23日」1992年6月23日
「報告書『歓迎 吹奏楽パレード』第2回準備会 平成4年7月8日」1992年7月10日
「報告書『歓迎 吹奏楽パレード』第3回幹事会 平成4年7月21日」1992年7月22日
「報告書『歓迎 吹奏楽パレード』第4回幹事会 平成4年8月17日」1992年8月19日
「報告書『歓迎 吹奏楽パレード』第1回幹事会 平成5年2月19日」1993年2月23日
「報告書 '93 サイトウ・キネン・フェスティバル 松本『歓迎 吹奏楽パレード』説明会 平成5年
3月2日」1993年3月3日
「サイトウ・キネン・フェスティバル吹奏楽パレード計画書（案）」日付記載なし

<雑誌記事>

「この秋松本は音楽に染まる サイトウ・キネン・フェスティバル松本 概要が決定しました」
『広報まつもと』1992年5月15日号 松本市役所、4頁。

<パンフレット>

パンフレット（1992）「'92 SAITO KINEN FESTIVAL MATSUMOTO『歓迎 吹奏楽パ
レード』国宝松本城合同演奏会」
パンフレット（1992）「斎藤秀雄とオーケストラ」
パンフレット（1992）「サイトウ・キネン・オーケストラ 子供のための音楽会」
松本市国際音楽祭推進団体協議会『'92 サイトウ・キネン・フェスティバル松本』

【ウェブサイト】

セ이지・オザワ 松本フェスティバル公式ホームページ「'92 SKF レポート」< <https://www.ozawa-festival.com/> >2021年4月25日最終閲覧。
松本市公式ホームページ「市民憲章・都市宣言」< <https://www.city.matsumoto.nagano.jp/shisei/siyakusyo/about/kensho.html> >2021年4月25日最終閲覧。
松本市公式ホームページ「新たな総合計画（基本構想2030、第11次基本計画）の策定を進めています」
< <https://www.city.matsumoto.nagano.jp/smph/shisei/sogo/20200204sougoukeikaku.html#cms77FF4> >2021年4月25日最終閲覧。

（2021年4月30日受理、5月14日掲載承認）

